

鹿児島県奄美パーク

Kagoshima-Prefectural Amami Nature And Culture Center

総合展示ホール解説



総合展示ホール

奄美は四方を海に囲まれ、切り立った山を背に集落が挟まれる形で、シマを形成している。この海、集落、山という地形の構造は、同時に奄美の歴史、民俗、文化にも深く大きく関わっている。

総合展示ホールは、奄美の集落をモデル化し、海の道、テーマウォール、シマの道、森の道、4つのゾーンごとに、実物大の模型や写真、映像等で、奄美を見て知って体感してもらうもの。観光客はもとより地元の人たち、そして次代を担う子どもたちに、奄美の歴史を包括した独自の風習や民俗、文化を分かりやすく理解してもらう趣旨で構成されている。

鹿児島本土から台湾にかけて、およそ1200キロにわたって飛び石のように連なる島々。これらのちょうど中ほどに奄美群島があり、喜界島（きかいじま）、奄美大島（あまみおおしま）、加計呂麻島（かけろまじま）、与路島（よろじま）、請島（うけじま）、徳之島（とくのしま）、沖永良部島（おきのえらぶじま）、与論島（よろんじま）の8つの有人の島を総称している。

また、奄美群島は交通や交易の中継地として、黒潮の流れの中に位置することから、古くから人やモノがこの島々を行き交ってきた。南東の産物を求め渡ってきた北からの人や文化、黒潮にのって南から寄せてきた人や文化が出合い交わるところに、奄美の豊かな文化が生まれた。豊穡をもたらすといわれている海の彼方の理想郷・ネリヤカナヤ、姉妹（ウナリ）が兄弟（イヒリ）を守るウナリ神信仰、豊穡と安寧を願って行われるノロ（注1）の神祭り。「奄美のここ」は、この海幸と山幸の恩恵を受けて育まれてきた。

奄美のシマ（集落）の多くが、山を背に海に面している。シマの背後にはカミヤマ（神山）と呼ばれる山があり、ここにシマを守る神、テルコの神（山幸の神）、ナルコの神（海幸の神）が降り立つ。はるか彼方の海には、神が住む豊穡の国、ネリヤカナヤがあり、目の前の海には、このネリヤカナヤから神が渡ってくる小さな島、立神が見える。集落近くの森とイノー（潮だまり）までが人の住む世界、そこから先は神の領域。この山と海との間で、人々は田畑を耕し、自然の恵みを受け、神々に守られて暮らしてきた。

シマの中心部にはミヤー（神を祀る清浄な空間）やトネヤ、アシャゲなどの祭場があって、シマの祭祀空間を形づくる。カミヤマと浜、それぞれからカミミチ（神道）がミヤーに向かってのびており、祭りの日、この道を通して神がシマにやってくる。人々は神を迎え、もてなし、そして再び神の世界へと送る。シマは神と人とが会える場でもある。

シマにはまた、神が宿る聖なる川や泉、岩、巨木などがある。自然や事物には霊的なものが偏在し、諸現象はその働きによるとする精霊信仰と、シマを守護するノロへの信仰などが、シマの今日の文化に大きく影響している。

古来、奄美の人々は月の満ち欠け、星の動き、季節風、渡り鳥の飛来などを読んで暮らしてきた。新暦が一般的になった今日でも、奄美では多くの祭事や行事が旧暦で行われる。

冬。12月の正月豚に始まる新年の行事。シマ（集落）は新たな年を迎える。黒糖づくりの最盛期。

春。田植え、サトウキビやサツマイモの植え付けが行われる。サンガツサンチ（旧暦3月3日）の節句、稲作行事の虫送り、そしてネリヤカナヤから神を迎えてもてなし、再び送るノロの神事、オムケとオホリ。

夏。稲の初穂を祝うアラホバナ、ノロの収穫祭フーウンメ、ミニャクチ。先祖が帰ってくる盆。そして、稲の収穫を終え、人々はミハチガツを楽しむ。

秋。旅に出ている家族の無事を祈るハマガンがシマの浜辺で見られる。

そして再び冬。イモの収穫を感謝する一年最後のノロの神事フユウンメ。

たて糸と横糸の長く緻密な交差から一枚の布ができるように、ノロの神事、ユタ（注2）の祈り、年中行事や人生儀礼、そして日々の暮らしがいくえにも折り重なって、奄美の豊かな一年が繰り広げられている。

（注1）ノロ：奄美が琉球国時代、王府から任命された職務で当時国家行事を司るカミンチュ（神人）。「女の姉妹は神様である」というオナリ神信仰の観念を基に、16世紀に琉球王府によって制度化された公的な神組織。琉球国王の尚真王（しょうしんおう）（1477～1526）時代には王の女の姉妹が、一番最高位である聞得大君（きこえのおおきみ）という役職に就く。その下、大阿母知良礼（おおあむしられ）やノロ神が、それぞれ琉球国王から任命書を受け、任命される。ノロ神は女性のみで代々世襲制なのが特徴である。

（注2）ユタ：神がかりなどの状態で神霊や死霊など超自然的存在と直接に接触・交流し、この過程で霊的能力を得て、占いかお祓いなどで、個人の悩みや苦しみの相談にのる。

海の道：アイノコ（合の子舟）



奄美は喜界島、沖永良部島、与論島をのぞき、四方を海に囲まれた山がちなシマである。現在のように道路や交通網が発達していないころ、人々は「海の道」を交流、交易、運搬・運行、舟漁、往来の中継など、生活必需海路として利用していた。海上交通の最たる役割を担っていたのが、舟である。奄美独特の舟が昭和初期の頃まで使用されていて大変活躍していたが、その歴史は古くて長い。奄美には、スブネ、イタツケ、アイノコとよばれるシマ独特の舟がある。スブネは、一本の木をくり抜いた舟のことである。主に漁労などに利用されていたものらしい。非常に重く、波乗りが悪いために活動性に乏しく、シマからすぐ近い海や湾内、イノー（潮だまり）などのような波静かな所で使用されていた。この舟のスブネという呼び方は瀬で漁をするという意味だと伝承されている。イタツケ（板付け舟）は、舟のオモテとトモ（前後）が同型の舟であり、舟底が浅く主に運搬に利用されていた。イタツケには小型から大型までいろいろの大きさの舟がある。特徴は前面も後面も同じ形で平たいので、波乗りが悪く速力が遅い反面、どっしりとして安定感があり、素人にも乗りこなせる。そして現在、一般的に「イタツケ」と呼ばれているのは「アイノコ」のことである。

アイノコは、従来のイタツケと沖縄を代表する伝統的な漁船・サバニの各長所をとって折衷（せっちゅう）した形であるのでこの名がある。サバニは速力が速く波切りがよいが、ころころして素人が乗ると転覆しやすい。沖縄の糸満漁師はこの舟に乗って遠く外国まで遠洋航海をするとのことだが、転覆してもすぐ起こす術に長け、積んでいる道具などを沈めない仕掛けをしてある。

アイノコについて、奄美の島唄の第一人者であり、奄美群島でアイノコ舟を今もなお現役で造り続ける舟大工・坪山豊さんに話を聞いた。

大正時代、アイノコを考案し製作したのは、坪山さんの舟大工の師匠で、日向の人（宮崎県出身）・海老原万吉氏である。彼は宮崎から沖縄に渡り、糸満漁師の宝といわれるサバニ造りの研究をした後に、大和村大金久の人と結婚し同地に永住した。初め客から舟造りを依頼されたとき、サバニの素晴らしさを知っているがそれを造るのは容易な技でできないことを知っていたので、馴れていたイタツケ船体にサバニの船首構造の長所を取り入れたという。使ってみると便利なのが分かり注文が募った。以後アイノコがイタツケにとって代わった。坪山さんは20歳の頃から舟大工の丁稚奉公に入り、現在まで55年間、アイノコ舟を造り続けている。これまでに造った舟は1,900艘以上。伝統を守りたい一心で木の舟造りにこだわり、宮崎県から取り寄せた杉材を半年乾燥させて、勘と漁師から聞いたものを頼りに熟練の技で、アイノコ舟を誕生させてきた。現在は、イタツケの型をまねた強化プラスチック（FRP）の舟が造られるようになったが、アイノコもシマの伝統行事・船漕ぎなどの競技用として今なお黒潮文化とともに受け継がれている。

シマの道：アシャゲ



奄美大島の各集落にはその中央部に必ずミャー（注1）という広場があつて、最初は宮の意味であつたが、後には庭または広場の意味にも用いられるようになった。アシャゲはこのミャーの傍に建てた方形の小屋で、各村において神を

招請して祭祀を行う場所のこと。奄美では旧暦2月、海の彼方の理想郷・ネリヤカ ナヤから豊穡をもたらす海神が、舟を漕いで立神といわれる沖合に見える岩山に降り立つ。そこに舟をつないで集落の浜にやってくる。オムケ（お迎え）の地で ある浜からカミミチ（神道）を通して、集落のミャーにやってくる。また、集落の背後にカミヤマ（神山）と呼ばれる山があり、集落を守る神が天空（オボツ・カグラ）（注2）から集落の背後にある神山に降り立つ。天空から降り立った神様は、神山からカミミチを通してミャーにやってくる。

集落を守るために海や天空からやってきた神々が、アシャゲの中でノロに成り代わって集落を守護する役割を担う。このような神様を来訪神（らいほうしん）、訪れる神と呼んでいる。

アシャゲはいろいろな形があるが、宇検村宇検のアシャゲは壁があり、普通の家のようになっている。加計呂麻島のアシャゲは壁のない床と柱だけの建物で、総合展示ホール内のアシャゲは、加計呂麻島の阿多地（あだち）集落をモデルにしている。

（注1）ミャー：神事やそれと関連する神遊びなどが行われる聖なる広場のこと。奄美大島では、もともとミャー内に神アシャゲ、トネヤ、相撲場並びに八月踊り場があったが、次第に分離するようになり、特に相撲場を広い場所に移したところが多く見られる。

（注2）オボツ・カグラ：神の居所の意。

シマの道：イビガナシ



奄美大島で村の聖地に立てられた自然石のこと。シマゴスガナシ（加計呂麻島武名（かけろまじまたけな））と呼ばれる例もあるが、一般には無名の場合が多い。最も代表的なものは加計呂麻島須子茂（すこも）のイビガナシで、アシャゲの傍らに大形の自然石が立てられている。総合展示ホール内に展示しているイビガナシは瀬戸内町油井（ゆい）のものをモデルにしている。

ミヤー（広場）には、ガジュマルやアホギ（アコウ）と呼ばれる神木が立っている。ミヤーの大木（展示物はガジュマルのレプリカ）の根元に数基のイビ（石）があり、イビガナシと呼んでいる。これは、常時集落にいて、集落を守ってくれる神様で、在住神と呼ぶ。シマゴスガナシの名称が示唆するように、イビは村建ての遠祖の墓のようである。

ミヤーにあるガジュマルや大木などを神木として、木の根元に石を置き守り神とする。

シマの道：ソテツ（蘇鉄）



ソテツは南国奄美を代表する植物の一つ。奄美の先人たちは、災害や飢饉の時にソテツによって生き存（ながら）えたといっても過言ではない。近世から昭和初期頃までソテツは救荒食物（きゅうこうしょくもつ）の一つで、主要食糧だった。現在は観賞用としても珍重されている。

昔は集落の至る所でソテツ処理の情景が見られた。ソテツには実（ナリ）から採れる澱粉（でんぷん）と、幹（ドウ）から採れる澱粉があるが、ソテツ澱粉には有毒成分のホルマリンとサイカシンが含まれており、処理方法には十分

注意しなければならない。この毒素抜きを怠ると、中毒症状を起こしたり死に至る場合もある。しかし近年では、毒素抜きをしっかりと行って食材として正しく用いれば、ソテツには鉄分や銅が多く含まれ、血流を良くしたり疲労回復などに効果があるといわれている。

ソテツ澱粉の有毒成分サイカシンは水溶性なので約一週間から十日ほど水にさらし、発酵させた後太陽の下で乾燥させる。ソテツの実（ナリ）のアク抜きは最初に殻を割り、中の実を取り出す（ナリ割り、と呼ばれている）。ナリを臼で搗いて碎き粉にした後、太陽光線の下、干して乾燥させる。更に水にさらし干して乾燥、ということを繰り返して、毒素抜きができる。ソテツの幹（ドウ）を食用にするときは、幹の外側の黒い鱗のついている皮を削り矧ぎ、中の白い部分を食パン一片位の大きさに切り、水にさらして毒素を抜き、乾燥させる。十分に毒素抜きを行ってから、実（ナリ）と同じように臼で搗いて粉にする。これを握り飯大に丸め、日に干して乾燥させる。

ドウの粉もナリの粉もそのまま炊いて粥にして食べた。現在では、味噌の原料として使用されている。

シマの道：住居



住居

昭和初期まで住宅は、一般に木造茅葺板壁（かやぶきいたかべ）であり、まれに瓦葺（かわらぶき）があった。縁（えん）は本来雨戸の外にあったが、大正以後内縁になった。家屋の構造は普通オモテ（母屋）と、トーグラ（居間、

あるいは食堂である家族団らんの場）の二棟からなり、トイマ（渡り廊下）でつなぐ。富豪や役人の家にはトーグラの下に更にシルデ（厨房あるいは炊事場）がつくことがあった。

奄美の民家の特徴として、玄関がなかった。オモテの建物に直接入れるのは家の主人か主人の客に限られていた。

トーグラ・シルデ

展示物にトーグラとシルデを再現した。民家の中の裏手にあたる居間兼台所。このような民家は昭和 30 年頃まで見られた。奄美は亜熱帯気候で、年間を通して湿度が 70 パーセント以上あるため、食物の保存方法には昔から多くの工夫が見られた。島国であるため雨水を利用して水不足に備えた。トーグラの棚の上に まつっているものは水神様である。土間（シルデ）の上の方には台所の神様であるヒヌカン（火の神）をまつる。

保存食として、飲料水、ナリ味噌、豚脂、パパイヤ漬物、ラッキョウ漬物、ニンニク漬物などがある。

奄美の人々の食生活で重要な役割を果たしていた味噌は、各家庭でまとめて造られて甕（かめ）に入れて保存されていた。チャジョケミス（茶請け用のなめ味噌）とシルワーシミス（味噌汁用）の 2 種類を造り、それぞれの用途に応じて使い分けていた。奄美の味噌の特徴は、ソテツの実（ナリ）が赤く熟れる秋から冬にかけて実を収穫して、ソテツの実（ナリ）を入れること。味噌造りの際は、近所の主婦たちが各自味噌を搗（つ）くためのアジン（たて杵（きね））を持ち 寄って集まり、協力し合ってお互いの味噌造りの手伝いをした。味噌搗き後には、その労をねぎらい油そうめんやご馳走が出され、主婦たちの社交の場でもあった。

また、アブラタレ（油脂づくり）はほとんど自家製であった。奄美の食文化を代表するものの一つに豚肉が挙げられるが、主に正月用の豚を解体するときに、そこから食用・調理用の油脂をとる作業を行った。豚の脂身やハレ（脂の膜）を鍋に入れて弱火で炒めると脂が出てくる。それを小さな甕に入れて台所に保存し ておき、使うときに少しずつ取り出す。

保存食用の入れ物は大小あるが、甕と壺の違いは、口の小さいのは壺で、口の大きな焼き物は甕である。

オモテ

家屋の母屋にあたる部分で、オモテ座敷（客間）とネショ（寝所）とナンド

（裏座敷）の三間があった。ネショとトーグラにはジロ（囲炉裏（いろり））が設けられた。ネショのジロは夏の間は使用せず、トーグラのジロは夏も使用する家が多かった。ジロの上にはアマダと称する吊り棚があり、薪（まき）や魚などを載せていた。

奄美パークの遊びの庭には、瀬戸内町の古志（こし）集落から古い民家を移築し復元した茅葺きの屋根の家があり、ここで昔の一般的な民家のオモテを再現している。

シマの道：バシャギン（芭蕉衣）



昔の奄美の衣生活で、最も長く着用されたのはバシャギン（芭蕉衣）であった。芭蕉衣の原料植物は、リュウキュウバショウ（別名・イトバショウ）である。バショウ山は、現在は数カ所にしか残っていないが、大正時代までシマの至る所の海辺や山裾や谷間などの石ころ地はバショウ山であった。

夏の作業衣はほとんどこれを着用、冬もこれを重ねて着用し寒さを凌いだという。旧藩時代には衣服も自給自足だったので、資源のバショウ山は大事な財産であった。

バシャギンができるまでには幾つかの工程がある。よい糸の採れそうなバショウを倒して外側の一、二枚を剥（は）ぐ。それをヒノリバサといい、生のまま裂いて乾かす。紐用材にする。次に芯までの約半分ぐらい剥ぐ。これをアラバサといい、作業衣や普段着用の材料にする。その次から芯近くまでのものをアジラバサまたはヤハラバサという。これは晴着用上着の材料である。それに

はちょうど成熟適期があり、光沢が著しく美しく目も覚めるような糸が出るものもある。これをキョラバサ、アジラバサという。これが高級衣の材料となる。このような高級最適期の見立ては熟練した者でなければできないといわれている。

大鍋に藁（わら）の灰汁（あく）を入れて炊いて、取り出ししごいて、中から繊維を出して川の水に一昼夜さらす。それを竿に干して乾かす。乾いた原料は束にして家の適当な場所に吊（つる）しておき、適時取り出してヲヲミ（苧繰（をを）み）する。ヲヲミとは、薄い帯状の原料から繊維を一本一本離して糸にして それを手探りでつないでいってウンゾケ（筴（ざる））の中に入れていく作業である。繰（くる）んだ苧は良い糸を撰びワク（杵）に巻き取る。これをカセバタ（経機）にかけていく。右手にワクを持ち左手にカセバタを持って、ワクの糸をカセバタに巻き替える作業だが、カセバタを右の端から左の端までの間、五回転して巻いて戻すと、一反の長さになる仕組みになっている。一反は二丈八尺だった。現在、一反は三丈。予定の算（本数）を掛け終わったら、アゼ糸を通してカセバタから外し、織機（地バタ）にかけて織っていく。

バシャギンの工程は先人たちの知恵と努力の結晶であり、今日の奄美の伝統工芸・奄美大島紬の礎になっている。

森の道



太古の自然が息づく奄美は、別名東洋のガラパゴスと呼ばれるように、ヒトと自然と生物が共生する島である。神々が宿るといわれる森には、奄美固有の

動植物が力強く生息し、訪れるヒトに畏怖と畏敬の念さえ抱かせる大迫力の様相を見せる。

奄美群島の中でも奄美大島と徳之島は、深い山に抱かれている。奥深い山林には樹齢数百年以上もの森の神・巨木がそびえ立ち、そこには世界的に保護しなければいけない貴重な生物が生息している。

奄美の代表的な動植物は、国指定特別天然記念物のアマミノクロウサギ、国指定天然記念物のアカヒゲ、ルリカケス、オオトラツグミ、オオストンオオアカゲラ、ケナガネズミ、カラスバト、アマミトゲネズミ、アマミヤマシギなど。また、樹齢100年ものスダジイ林が広範囲にわたって広がる住用川上流の神屋国有林や、稀少動植物が生息する亜熱帯広葉樹林地帯で奄美群島最高峰、海拔694.4メートルの宇検村湯湾岳も、天然記念物に指定されている。

総合展示ホール内では、奄美固有の動植物を原寸大の模型で紹介し、普段見られない夜の森の様子などを、音響や照明による演出で再現している。

テーマウォール



奄美の暮らしは海と切り離せない。昔は、先人たちがよく海を眺めている光景が各集落で見られた。潮の干満の変化や月の満ち欠けで、人々は時間や天候、そして漁や農作業など労働や生活の仕方についてのありよう（社会または集団が共有している生活の仕方についての様式や認識）などを予測するならわしがあった。暦の上では新暦に変わっているが、今でも奄美は農作業や生産などが旧暦のサイクルのリズムに合っていることから、年中行事は旧暦で行っている（集落によってはお盆を新暦に変えているところもみられる）。

年中行事とは季節の変化がもたらす自然の恵みなどに感謝し、毎年繰り返さ

れる集団的な伝承行事をいう。南島社会・奄美では、農業生産のための予祝（一年間の豊穰を祝い願う行事）や、豊作と除災の意味を持つ折目節句の季節祭が中心で、稲作地帯では旧暦10月の播種（はしゅ）（作物の種子をまくこと）から翌年6月の収穫までは、厳しい労働と物忌（ものい）み（祭事において神を迎えるために、一定期間の飲食や行為を慎み、不浄を避けて心身を清潔に保つこと）の連続であり、残る3ヶ月間が、さまざまな禁忌から解き放たれた歓楽と祭りの期間であった。

昇曙夢氏は「大奄美史」の序章で、以下のことを記している。「わが奄美大島は、琉球とともに日本文化の南限地として、悠久なる伝統を有する特徴の文化圏を構成している地域である。ただその位置が南方僻擧（へきすう）（注1）の地に偏在するがために、従来文化的に恵まれること極めて薄かったが、同時にこの孤立不便の環境が却って古文化の保存に幸いして、日本上代の貴重な文化の原始形態を比較的豊富にかつ純粋に保存し得たことはわが郷土の誇りである。現に奄美諸島には、日本本土においてとうに消滅した古代の風習や言語や土俗が多分に残っており、この点だけでも、日本上代文化の宝庫または博物館として貴重な存在であるが、そればかりではない。奄美大島は地理上薩摩と琉球との中間を占め、日本と大陸及び南洋との間に介在して、古来交通の要衝であったところから、つとに文化的搬路または文化交流の中継地として、大きな役割を果たして来たことは言うまでもない。」

昔、奄美の精神世界を象徴するノロの祭事を中心に一年が動いていたが、それと対比させて、一般家庭での風習や民俗、文化を含めた年中行事を、主に昭和30年代の写真とともにテーマウォールでは紹介している。

（注1）僻擧（へきすう）：へんぴ

オムケ（お迎え）

奄美でノロがテルコの神（山幸の神）・ナルコの神（海幸の神）からの来訪神（らいほうしん）を迎える祭り。瀬戸内町木慈（きじ）では旧暦2月の中の壬（みずのえ）の日にトネヤ（注釈1）で行われる。この日の3日前にアタリ（当番）は各戸から米1合を集めミシャク（神酒）を作り、トネヤの柱に縄で縛る。そのあとノロがトネヤに行き祝詞（のりと）を唱える。当日はノロたちがトネヤに集まり、神酒を飲む。オホリ（お送り）と相関しており、オムケの日から神はトネヤやアシャゲ（注釈2）に滞在するという。

注釈1「トネヤ」

奄美におけるノロの住居。ノロ行事の場でもある。上トネヤ・下トネヤがあ

り、互いに隣接する。両トネヤがほぼ完全な形で残っていたのは名瀬市大熊だけであった。

注釈2「アシャゲ」

ノロが行事の際、集落の神様を迎えるところ。奄美パーク内に展示してあるアシャゲは、奄美大島の南にある加計呂麻島の西側よりにある阿多地（あだち）集落のアシャゲをモデルとして新材で再現したもの。

神様に供える飲み物で欠かせないのがミキ。椀に入った白いものがそうである。カライモが原料でその横にある鍋に入ったものが芋を煮ている状態。甕に入れて芭蕉の葉で蓋をし、3日間発酵させる。足付盆に載せているものは山の神様と海の神様への供物である。

オホリ（お送り）

奄美でノロがテルコ・ナルコからの来訪神を送る祭り。旧暦2月の壬（みずのえ）の日にオムケの祭りで迎えた神を、4月壬の日に送る。瀬戸内町加計呂麻島 瀬相（せそう）ではトネヤで神祭りをしたあとで神が船出するとして、ノロたちが神道（かみみち）を通して海辺へ〈ナルヘー・テルヘー〉と唱えつつ行く。海 辺へ出るとノロたちは並んで海に手を振って神を送りトネヤに帰る。瀬戸内町与路島では海辺の岩で神の船の錨（いかり）を解くしぐさをする。

新穂花（あらほばな）

加計呂麻島で行われるノロによる稲の初穂祭。民間で行われる初穂祭はシキヨマなどといわれる。瀬戸内町阿多地では、旧暦6月・初の戊（つちのえ）の日を ウチギヘイといい、ノロはアシャゲに集まる。グジ（注釈4）ノロが水田で7本の稲穂を抜いてくると、小臼（うす）にその粃（もみ）の穂を落とす。稲穂はトネヤに仕掛けておく。次にくる月の中の戊の日がアラホバナで、ノロはトネヤに掛けておいた稲穂で小臼の上を3回まわし祭る。

注釈4「グジ」

奄美ノロ行事のさいノロやウツカンの賄（まかな）い役にあたる男性神役。グジヌシともいう。親ノロ1人とウツカン2人に各1人ずつつく。グジもノロと同じく、決まった家系の者から選出される。親ノログジは、親ノロの住居する下トネヤの管理のほか、諸祭祀の諸道具を管理し、祭りの準備の裏方役などを務める。藩政時代、それぞれのグジは、テジリ田・テジリ畑と呼ばれる職田（しきでん）を耕作し、そこでできた米や作物を祭祀用に使っていた。

親ノロ

奄美での信仰を司るノロの中心役。王府時代、祭政一致の政策をはかるため、上級役人の娘から選び出された。補佐役にウツカンが2人いた。この3人はノロ3役ともいえる役柄である。こ3役には、〈テジリ田・テジリ畑〉が与えられ、その田畑で農産物が作られる。収穫した作物はノロ祭事やノロ用に差し出された。

ウフンメ・フーウンメ（大折目）

加計呂麻島で旧暦6月に行われるノロの神祭の一つ。旧暦6月の中の戊（つちのえ）の日、庚（かのえ）の日と集落によって日取りはちがうが、粟（あわ）の初穂祭といわれている。祭りは稲の初穂祭であるアラホバナと全く同じで、三日ミシャク（神酒）をかき混ぜるのに粟の初穂をもってする点が異なるだけである。神酒は白蟻に害されないようにと、アシャゲやトネヤの柱の根っこに注いだ。

水口（ミニャクチ）

加計呂麻島のノロによる稲の予祝行事。ミニャクチは水口という意味らしい。薩川（さつかわ）など4集落で現在も行われている。武名（たけな）では旧暦6月の第2の己（つちのと）の日に、アシャゲで行う。村のアタリ（当番）の女性が2日前の丁（ひのと）の日に、家々から米を集め粉にしたものを煮て、生のサツマイモのすり汁を加えて甕にミシャク（神酒）の用意をする。アシャゲにムシロを敷いて神人（カミンチュ）たちが座り、神酒を飲み、豊作を祈る祝詞を唱える。アラホバナから始まる一連の稲の収穫感謝・予祝感謝の最後にあたると考えられる祭り。奄美大島宇検村生勝（いけがち）でも7月1日にミニャクチ祭事があった。当日、グジヌシ（男性神役）とノロが田の水口に行って鍬（くわ）を3回入れ、神酒を注いで唱えごとをした。

ショッチョガマ

旧暦8月初丙（ひのえ）の日（アラセツ）に奄美大島龍郷町秋名（あきな）で行われる収穫感謝・豊作予祝の年中行事。同じ日、ヒラセマンカイも催される。山手の高いところに片屋根の藁葺き小屋（ショッチョガマ屋敷）をつくり、早朝、初めて祭りを迎える男児に屋根を踏ませ、その子の成長を祈願、その後男たちが屋根に上がり、グジの唱える稲霊（とうれい）招きの歌を唱和し、小屋を揺する。うたい終わるたびに〈ヲラ、メラ〉と声をかけ、小屋が倒れるまで続ける。小屋が倒れると、その上で八月踊りを踊り、収穫の感謝と来年の豊作を祈願する。この祭事は〈早朝—男性—垂直神〉という形式があるのに対し

て、ヒラセマン カイは〈夕方—女性—水平線上の神〉という形式を持つ。同じ日の朝夕の満潮時に行われるところに特徴がある。

平瀬（ヒラセ）マンカイ

旧暦8月初丙（ひのえ）の日（アラセツ）の夕方、奄美大島龍郷町秋名で行われる収穫感謝・豊作予祝の行事。同日の早朝にはショッチョガマも催される。集落西方の海岸にある〈神平瀬〉と〈女童（メラベ）平瀬〉と呼ばれる二つの岩上で行われる。〈神平瀬〉には親ノロ・ノロが5人、〈女童平瀬〉には男女の神人（カミンチュ）7人がのぼり、交互に歌をうたい、稲魂を手招くしぐさ（マンカイ）を繰り返す。これは海の彼方（水平線上）の神々を招き寄せて、収穫の感謝と来年の豊作を祈願するものである。また、〈神平瀬〉は2個の平たい石に挟んだ赤飯を供物として供え、初めて祭りを迎える女兒に岩を踏ませ、健康に育つことを祈願する。海岸で集落あげての祝宴が行われたあと、夜には八月踊りが踊られる。

フユウンメ（冬折目）

加計呂麻島のノロによるイモの収穫感謝・予祝儀礼。旧暦11月戊（つちのえ）の日、トネヤで行う。神衣（かみぎぬ）・神サジ・カブリカズラは使用しない。神酒は三日ミシャクを用意する。主にサトイモ・ヤマイモ・サツマイモを高膳にのせて供える。神人たちはそれを前に、神酒を飲んで唱えことをする。村人は直接この祭祀には関与しない。

正月

床の間には松の生花、鏡餅、サンプシケ（三宝）と称する塩盛り、昆布、干し魚を供え、飾り物として八頭、鶴亀（大根でこしらえる）などを大皿に載せて飾り、硯蓋（すずりぶた）（五寸厚さくらいの豚肉と野菜の山盛りなど）と三献（さんごん）台などが飾ってある。夜が明けたら床の間の前に家族全員集まり、家長から順に男から女と順に座り、三献の儀式を行う。

若水（わかみず）

正月の明け方に最初に汲みに行く泉や井戸水を若水という。

現在では、十五夜の豊年祭の朝早く若水を汲んでノロ神様に祀る。その水を相撲の本番の際、力水の中に入れて使うところもある。

三献（さんごん）

奄美で正月や祝日などに行う儀式。祝いの朝、一家の主人を含め5人、または7人の奇数の人々が、吸物や高膳に供えた料理や酒を飲食する。最初に7種類の品を入れた吸物、次に二切れの刺身、最後に鶏肉だけの吸物と、3回膳を替える。その間に酒と高膳の3種盛り（塩・昆布・干魚）の一品ずつを主人が手渡してすすめていく。

三月三日（サンガツサンチ）

奄美・沖縄の年中行事。

奄美全域で旧暦3月3日に、または徳之島では旧暦7月に行われる海岸へ下りる行事。3月3日には餅を作り、先祖に供える。老若男女海岸へ下りて潮干狩りをする。この日に海の物を鍋に入れないと、耳が聞こえなくなったり、一年中魚にありつけないという。与論島では初めてこの日を迎える子どもに海の潮をかけたり、かごの持ち初めをさせる。もし子どもの家で出産・葬式などの不浄があるとこの日の海遊びに参加できない。徳之島では旧暦7月の盆のあとにくる丙（ひのえ）・丁（ひのと）・戊（つちのえ）の3日間にわたり浜下（はまお）れをする。丙の日が準備の日で海岸に簡単な仮小屋とさんご石3個でかまどを作る。丁の日には赤飯などを作り、晴着姿で全員浜へ下る。前年の浜下れ以後の新生児の額を潮でぬらし、海岸の白砂を踏ませる。

虫送り（マネアシビ、ハマオレ）

田畑の害虫であるネズミやバッタ、カタツムリなどを捕らえて海に流して、害虫駆除を祈願する行事。奄美大島瀬戸内町管鈍（くだどん）ではハツマネ（旧暦4月の初午）の日に、田に行き害虫を捕らえサトイモの葉に包んで流し、浜下れをした。加計呂麻島でも同じように行われるが、旧暦4月初めの寅（とら）の日をトラアシビ、初申（さる）の日をサネアシビといい、集落によってどちらかの日に虫送りをする。

喜界島では、旧暦4月から6月の甲子（きのえね）の日にサトウキビの葉に乗せ、海に流した。徳之島東北部では、旧暦3月申子の日にムシオドイ（虫踊）を踊ってから、夕方クバ舟に乗せて流した。奄美大島と徳之島では、ハブ除けの行事アジラネやマーネ（注釈3）と密接に関連しているのが特徴。

注釈3「マーネ」

4月最初の午の日をハツマネとして業を休む。ハブを鎮めハブの難を避ける祈りの祭り。4月中に午の日が3回ある年はマーネを3回する。この日はその決まりはないが習慣として各家庭ニラ汁を食べるほか麦粉と黒糖をまぶしたものを作って食べる。これをはったい粉という。この頃が麦の収穫期である。

五月五日（ゴガツゴンチ）

端午の節句。旧暦5月5日。昔鬼に追われた人間が菖蒲畑に隠れてその難を逃れたとの言い伝えから、現在でも軒先に菖蒲と蓬を挿して悪魔を祓い、万病をさける印としている。また、アクマキなどを作り霊に供える。

シキヨマ

奄美の稲の初穂祭で、稲作儀礼の中で最も重要な行事。ノロ祭事として行われていたアラホバナが一般家庭で行われるようになったもので、シコマ、シキヨマ、イニーシクマ（名瀬周辺）、ウチキヘ（加計呂麻島）など地域によって名称が異なる。旧暦6月に家の内外、一切の家具什器（じゅうき）を清め、道を掃除したあと稲穂数本を田から持ち帰り、神に供え、さらに初穂の米粒を入れた飯を炊き、神に供えて家族も共食する。名瀬周辺地域では、夕方水田から稲穂3本をとってきて床の間に供える。大島北部では、初穂を混ぜて炊いたご飯を子どもたちが少しずつ持参して集落内の高い場所や海岸に出かけ、田の名前を呼んで、その田の穂がよく実るようにと叫ぶ。

シキヨマのあとの丙（ひのえ）の日（アンガシキ）に初めて新米を食べる。

盆行事

旧暦7月7日をタナバタと称し、早朝墓に行き〈あと7日から盆祭りだからおいでください〉と告げる。13日の朝、タナバタに使った竹の枝の付いている部分は海に流し、幹は墓の花立てにする。夕方墓に行き、提灯（ちょうちん）をとともに迎えに来る。また、庭先に無縁仏や水死人の魂のために、ミズダナと称する供物を置く棚を設ける。位牌は仏壇からおろして床の間または床の前に設けた祭壇（机など）に移し、祭壇の上に線香・花・菓子・よそからの供物（おもに蒸粉菓子・果物・野菜など）・お茶・酒を供える。壇の下に花ごぎを敷き、膳を供え、屏風で囲む。膳は位牌の数に合わせる。14、15日は朝夕膳を替え、大正時代以前はすべて精進料理であったが、近年は家々でまちまちである。

ミハチガツ

奄美大島で旧暦8月を中心に行われる行事。アラセツ、シバサシ、ドンガの3大節目という意味で、こう呼ぶ。旧暦8月は行事の多い月である。稲・粟・サトウキビなどの収穫も終わり、サトイモ・サツマイモなどの食物も一番豊富な季節で、ミーニシ（北風）が吹き始め、月が美しく照り渡る時季でもある。

【アラセツ】

旧暦8月の初めにくる丙（ひのえ）の日がアラセツである。前日をシカリ日（シカリとは仕掛け準備の意味で、祭りができるように準備することであり、前夜 祭を指す）、ユーハシ（夜ふかし）とか呼び、アラセツの祭りの準備をする日である。主婦は餅を作る。この日の夜から八月踊があり、最初にトネヤ（ノ口の祭 場）から踊りを始め、各家々を踊って回る。アラセツにはコソガナシ（高祖加那志）を祭るといい、主婦は朝早く起き、海で潮をかぶって体を清め、高膳に新 穀、餅、サトイモ、尾頭付きの魚、酒を添えて、床の間の前や縁側に供える。この日に赤飯を炊き、その炊き汁をススキなどで家の内外にかける。これをセチバ ケーシュン（節を替える）という。アラセツの翌日がケシバデ（遊日）で仕事を休む。

【シバサシ】

アラセツから7日後の壬（みずのえ）の日がシバサシである。コソガナシが墓からおいでになるといい、前日の早朝に墓参りをする。家の軒端や畑の四隅にス スキをさす。またコソガナシを迎えるために、夕方家の入口でもみがらや草などをくすぶらせる。八月踊をアラセツと同じようにする。龍郷町秋名ではアラセツ の早朝、ショッチョガマと平瀬マンカイをする。

【ドンガ】

シバサシのあとの甲子（きのえね）の日をドンガといい、奄美大島北部では八月の行事の終わりの日であるとし、シカリ日に改葬（かいそう）をする。この日 にサトイモを混ぜて作ったご飯を食べるところも多い。ドンガはミハチガツの行事の中でも重要視され、この日には嫁入りした人たちも実家に帰り、墓参する。 奄美大島南部ではドンガから数えて8日目の辛未（かのとひつじ）にトモチという八月行事がある。前日に改葬、洗骨（注釈5）、この日に墓参をする。いわば 夏の終わりがドンガであり、奄美大島南部ではトモチである。このあとには正月が重要な節目として残っているだけである。ミハチガツでは祖霊祭と農耕儀礼が 共通した要素である。

注釈5「改葬、洗骨」

埋葬したなきがらはやがて腐敗し、棺も腐朽して崩れて遺骨は土や腐肉に汚れているに違いない。それでは浄土（グシュグクラク）に行けないから、その土を 落とし腐肉のしみを洗い、極楽に行けるようにきれいにしてあげる必要がある。こう考えるので適当な時期にカイソー（改葬）してあげることになる。改葬の意 義は「キョラサ ナシ オセル」（きれいにして上げる）ということ

で、それはグシュグクラクに行ける資格をつけて上げるとのこと。グシュは後生の意で、人は死んでからあの世（コソの世）で後生の暮らしをするものとの信仰である。改葬はその体肉が完全に土になり骨だけになったとみる頃に行う。従って腐敗の早い地質の墓地は三年忌が済んだらその次の年か翌々年ぐらいに行うことが常識になっているが、腐敗の遅い所では七年忌を済ませてから行うことが多いことになる。他方、改葬のついでに墓碑を建てるのが一般的になっているので、石碑を買う経済上の都合で延び延びになることもある。また改葬してはならない年というのがあり、改葬を企図しても実行までに至らないなど、改葬は何年後と決まらないわけである。改葬できない年とは旧暦に閏年がある年と、その家に新仏が出た年である。改葬する日は所により異なるがその村では一定していて何時でもやるわけにゆかない。「大奄美史」には旧九月十九日とあり、「与論島の民俗」では十月二十七日または二十九日とある。名瀬市根瀬部（ねせぶ）から大和村にかけ、その他の村でも多くはドンガのシカリ日であり、カネサルを祀る知名瀬などではそのシカリ日にするようである。改葬の墓堀（はかほり）は死者の近親（孫、甥など）が行い、いよいよ遺骨が出る間際になると死者の子か兄弟に替わる。骨を日光に晒（さら）すことを忌（い）むので骨が出かかると穴の上に傘を翳（かざ）し、出た骨は側に傘をさしている婦女子（死者に娘があれば娘が当たる）に渡す。墓における洗骨行事が終わると死者をきれいにしておいたとあって改葬の家に引き揚げてお祝いをする。

九月九日（クガツクンチ）

旧暦9月9日に行われる健康祈願の行事。中国の陰陽思想による五節の一つである〈重陽〉の〈重陽の節〉ともいう。願直しとグウインタテ（願立て）が行われる。前日にミシャク（神酒）を造る。当日の午前中に願直し、夕方に願立てをする。前者では神酒と魚、野菜の煮物を供え、後者では米3升3合と酒（焼酎）を供える。家で行う場合はヤーグワン（家願）、テラ（社寺）で行う場合はテラグワン、浜で行う場合は浜願（ハマグワン）と称する。願直しは過去1年豊穰息災の祈願である。

ムチモレ

餅貰いのこと。仮装した子どもや青年たちが踊りながら各家々を訪れ、米の粉と砂糖とサツマイモを混ぜて月桃（げっとう）の葉でくるんで蒸したカシャ餅を貰ってまわる行事。奄美大島と徳之島に分布。奄美大島北部では、旧暦9月から10月の庚申（かのえさる）の日に行われるのでカネサル、または種下ろしという。種下ろし（種子取）とは本来別のものではあったが、いつのころからか習合（しゅうごう）したものであるという説もある。名瀬市芦花部（あしけ

ぶ)では ジュウカタム、大島南部や徳之島ではタネムッチ、ムチタボリ、アキムチなどという。徳之島町神之嶺(かみのみね)では各家庭をまわるとき、クガネイシという自然石を表庭に落とし、〈…遠い兄弟は食っての思い出、近い兄弟は遊んでの思い出、クガネと餅を替えてください〉と歌い、餅を貰った。伊仙町犬田布(いぬたぶ)ではイッサンボという藁(わら)人形を先頭に立てた。ムチモレは各地域で異なり、瀬戸内町渡連(どれん)では6月、徳之島町手々(てて)では盆の15日に行われる。

鹿児島県 奄美パーク

奄美の郷

〒894-0504

鹿児島県奄美市節田1834

Tel 0997-55-2333

Fax 0997-55-2612

田中一村記念美術館

Tel 0997-55-2635

Fax 0997-55-2613

Kagoshima-Prefectural Amami Nature And Culture Center